

## [果樹部門]

### 11. ブドウのチャノキイロアザミウマの薬剤感受性

#### [要約]

県南の施設ブドウに発生するチャノキイロアザミウマは、合成ピレスロイド系剤、ネオニコチノイド系剤の一部及びサンナイト水和剤に対して薬剤感受性が低下している。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 病虫研究室

[連絡先] 電話086-955-0543

[分類] 情報

---

#### [背景・ねらい]

施設ブドウを中心にチャノキイロアザミウマによる果実被害が多く、品質低下の大きな原因となっている。その理由の一つとして、薬剤の防除効果が低下していることが考えられるため、本虫の薬剤感受性を明らかにし、効率的な防除対策に資する。

#### [成果の内容・特徴]

1. 2013年に県南の施設ブドウ「マスカット」で採集したチャノキイロアザミウマは、スカウトフロアブル、テルスターフロアブル、ダントツ水溶剤、サンナイト水和剤に対して感受性が低下しており、アーデント水和剤、モスピラン顆粒水溶剤に対してやや低下している（表1）。
2. 同一系統の薬剤であっても感受性が異なり、過去に感受性が低下したネオニコチノイド系剤のアドマイヤー顆粒水和剤、ベストガード水溶剤は感受性の低下が認められない（表1）。

#### [成果の活用面・留意点]

1. 農薬の使用履歴が異なる圃場では本虫の薬剤感受性が異なる場合も考えられる。薬剤散布3～7日後に、枝の先端をたたいてチャノキイロアザミウマを白い板の上に落とし、ルーペで生死を観察し、圃場毎の薬剤の防除効果を確認する。
2. 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤の連用を避ける。
3. 天敵を利用している圃場では、天敵に影響が小さい薬剤を使用する。日本バイオロジカルコントロール協議会の天敵影響表によると、天敵ミヤコカブリダニ（成虫）に対してアドマイヤー（剤型不明）、モスピラン水溶剤の影響は小さく、ベストガード水溶剤の影響はやや小さい。天敵スワルスキーカブリダニ（成虫）に対しては、アドマイヤー（剤型不明）の影響はやや小さく、モスピラン水溶剤の影響はやや大きい（参照）。

[具体的データ]

表1 ブドウのチャノキイロアザミウマ幼虫の薬剤感受性<sup>z</sup> (2013年)

薬剤名	希釈倍率	供試虫数	死虫率 (%) <sup>y</sup>	判定 <sup>x</sup>	系統名	果粉溶脱 <sup>w</sup>
ジェイエース水溶剤	1,500倍	40	93.0	○	有機リン	×
パダンSG水溶剤	1,500倍	40	96.7	○	ネライストキシン	×
アーデント水和剤	1,000倍	40	76.6	△		×
スカウトフロアブル	2,000倍	40	19.8	×	合成ピレスロイド	×
テルスターフロアブル	4,000倍	40	34.3	×		×
アドマイヤー顆粒水和剤	5,000倍	40	94.2	○		○
ベストガード水溶剤	1,000倍	40	90.2	○	ネオニコチノイド	×
モスピラン顆粒水溶剤	2,000倍	40	78.0	△		×
ダントツ水溶剤	2,000倍	40	15.2	×		×
コテツフロアブル	2,000倍	40	97.5	○	ピロール	○
サンマイト水和剤	1,000倍	40	12.3	×	その他	×
ディアナWDG	5,000倍	40	96.7	○	マクロライド	○
水	—	40	0.8	—	—	×

<sup>z</sup> 検定は、葉片浸漬法で行った

<sup>y</sup> 死虫率：死虫個体数 / (生存個体数 + 死虫個体数) × 100。検定に供したチャノキイロアザミウマは、県南の1産地3温室からの採集個体群で、平均死虫率を示す

<sup>x</sup> 判定：○；感受性の低下なし（個体群の平均死虫率が90%以上）、△；感受性がやや低下（個体群の平均死虫率が70%以上90%未満）、×；感受性が低下（個体群の平均死虫率が70%未満）

<sup>w</sup> 果粉溶脱：○；実用上問題なし、×；実用上問題あり。雨除け栽培「マスカット」果粒軟化期（8月12日）に薬剤散布し、9月9日調査



図1 チャノキイロアザミウマによる「マスカット」の被害（右：被害果粒の拡大）

[その他]

研究課題名：ブドウのチャノキイロアザミウマの防除対策の確立

予算区分：交付金（難防除病害虫防除技術対策）

研究期間：2012～2013年度

研究担当者：薬師寺賢、佐野敏広

関連情報：平成17年度試験研究主要成果、31-32